

放送アーカイブを活用した初期テレビドキュメンタリー研究：NHK『日本の素顔』（1957-1964）を中心に

著者	丸山 友美
著者別名	MARUYAMA Tomomi
発行年	2021-03-24
学位授与番号	32675甲第502号
学位授与年月日	2021-03-24
学位名	博士(社会学)
学位授与機関	法政大学 (Hosei University)
URL	http://doi.org/10.15002/00024112

博士学位論文
論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	丸山 友美
学位の種類	博士（社会学）
学位記番号	第 749 号
学位授与の日付	2021 年 3 月 24 日
学位授与の要件	本学学位規則第 5 条第 1 項(1)該当者(甲)
論文審査委員	主査 教授 藤田 真文 副査 教授 鈴木 智之 副査 教授 津田 正太郎 副査 (学外) 東京大学大学院情報学環准教授 丹羽 美之

放送アーカイブを活用した初期テレビドキュメンタリー研究
—NHK『日本の素顔』（1957-1964）を中心に—

1. 審査の経緯

本委員会は 2020 年 6 月 23 日に社会学研究科博士学位申請論文審査委員会における論文受理の決定を受け、同日発足した。受理小委員会からの修正要求を受け提出された論文について、2020 年 11 月 3 日開催の小委員会で査読を行なった結果、本委員会から再度修正を要求することとした。本委員会からの修正要求を受け 2020 年 12 月 7 日に再提出された論文について、2021 年 1 月 5 日に小委員会を開催して査読に基づく最終的な意見交換を行い、口述試験の方針を決定した。2021 年 1 月 9 日に口述試験を行い、同日審査小委員会を開き、論文及び口述試験の結果について検討を加えた。

2. 結論

本委員会は丸山友美氏の博士学位請求論文を、全員一致で博士学位授与に値するものと判断する。

3. 論文の課題

本論文は、日本における社会派ドキュメンタリー番組の先駆けとされる『日本の素顔』（以下『素顔』）を、放送アーカイブを活用し分析することで、テレビドキュメンタリーの表現形式が初期テレビ制作の現場でどのようにして成立・発展してきたのか論じるものである。本論文では、東京／大阪、男性／女性、エリート／アシスタントといった分析軸から、初期テレビドキュメンタリー史に新しい解釈をつけくわえることを試みる。

これまで NHK の編纂した『放送史』は、社団法人東京放送局（以下 AK）の足跡から、放送全般の歴史を記述しようとしてきた。それゆえ、ほぼ同時に放送を開始したにもかかわらず、社団法人大阪放送局（以下 BK）や社団法人名古屋放送局（以下 CK）を東京に従属す

る地方局とみなし、番組を生み出す制作者の営為やオルタナティブな特性は十分に記述されてこなかった。そうした事態を反映するように、『素顔』に関する先行研究は、番組の立ち上げから参加し、1958年1月5日の第8回「日本人と次郎長」の放送によって、その方向性を決定づけたといわれる東京放送局所属のプロデューサー吉田直哉のテレビドキュメンタリー論によってその理解を進めてきた。

筆者は、戦後日本をさまざまな形で記録したテレビドキュメンタリー・シリーズ『素顔』に新しい解釈をつけくわえるため、放送アーカイブを活用して番組の見直しに取り組んだ。そうしてNHKアーカイブスに残る約240回分の『素顔』の映像資料を視聴する作業によって、『素顔』では吉田以外の多くの制作者が番組制作に携わっていたということが明らかになった。そして、アーカイブには吉田が語るのとは異なる哲学や方法論によって制作されたように思われるドキュメンタリー番組が数多くあった。筆者にとって興味深かったのは、そのように感じられる番組の多くが、NHKにおいては通称「BK」と呼ばれる大阪放送局の制作集団によって制作されていたということである。

本論文の筆者は、放送アーカイブを活用することで、これまであまり言及されてこなかった番組や制作者の存在を確認することができた時、「初期テレビ制作の現場において番組スタッフは、テレビドキュメンタリーという表現形式をどのように理解・共有していたのだろうか」という問いが浮かんできたとする。それはつまり、彼ら彼女らはテレビドキュメンタリーという表現形式をいかに理解・習得し、それを仮に「制作現場の知」と呼ぶならば、初期テレビドキュメンタリー制作者たちは、その「知」をどのように番組に落とし込んでいったのだろうかという問題関心である。本論文は、こうした筆者のアーカイブ体験を始点に、『素顔』スタッフが、初期テレビ制作の現場においてテレビドキュメンタリーという表現形式を制作する際に、どのような方法論を形成・共有していたのかを明らかにしようとする。

4. 研究の方法

(1) 研究の焦点

以上のような問題関心をもつ本論文は、初期テレビドキュメンタリー史に新たな解釈をつけくわえるために、以下の3点から『素顔』の見直しを試みている。

第一に、「BK」にかんする番組資料と番組制作関係者の語りを収録した活字資料を収集・考察し、初期テレビドキュメンタリー史にローカルの視点を持ち込むことを試みる。そのために本論文は、誰が、いつ、どのような番組を制作したのかという基礎的な情報について放送アーカイブを使って視聴調査したり、周辺資料を収集したりすることを通じて『素顔』全体像を把握した。つまり、『素顔』で「誰が（制作者）」「何を（内容）」「いつ（放送日）」、「どのように（形式）」放送したのか把握するだけでなく、BKの番組制作者は「なぜそのように（理由）」番組を制作したのかという制作意図も把握した。

第二に、初期テレビ制作の現場において理解・共有されているフォーマル／インフォーマルな規範やルールを抽出し、それを支える仕組みや制度から、制作者の葛藤や対立といったテレビドキュメンタリー史のグラデーションを描出することを試みた。そのために本

研究は、収集した紙資料や実施するインタビュー調査での番組関係者やその遺族の語りから、『素顔』を制作する中でテレビドキュメンタリーという表現形式でどのような試みがなされたのかを明らかにする。例えばそれは、企画の立て方、カメラの使い方や録音の仕方を含んだ取材方法、映像と音の合わせ方やつなぎ方といった映像編集の方針というように、テレビドキュメンタリー制作に対する特定の価値や確信、あるいは仕事のパターンといった観点から表象されることになる制作現場のやり取りがこれに相当する。初期テレビ制作の現場においてテレビドキュメンタリーという表現形式のあり方が理解・共有され、制作・放送されるようになるまでの制作集団内のやりとりを分析した。

第三に、以上の作業によって確認した「テレビ制作現場の知」を踏まえながら、過去の放送番組を視聴して記述するというテキスト分析の方法によって、『素顔』を新たな角度から見直した。そのようにして明らかになった『素顔』の重層性や複数性を、初期テレビ制作の現場における豊かさとして初期テレビドキュメンタリー史に書き加えることを試みた。

(2) 研究史資料等

以上の目的を達成するため、本論文では、以下三つの作業テーマを掲げて研究を進めた。

第一に、『素顔』の全体像や放送史における BK の特徴を把握するため、関東圏と近畿圏において資料の所在を調査し、その視聴や収集を行なった。まず、関東圏においては、NHK アーカイブス（埼玉県川口市）や NHK 放送文化研究所（東京都港区）、放送ライブラリー（神奈川県横浜市）にて資料の所在を確認し、その視聴や収集を行った。ここでは主に、番組の視聴と放送台本の閲覧、そしてデータベースに登録されている制作者情報や番組概要の調査を行った。法政大学大原社会問題研究所（東京都町田市）や国立国会図書館（東京都千代田区）、立教大学図書館（東京都豊島区）、放送博物館（東京都港区）では、日本放送労働組合の機関紙である『日放労』の他、各種新聞・雑誌に掲載された番組紹介記事や制作者紹介記事、機関紙『週刊 NHK 新聞』や局内紙『日本放送協会会報』、放送史資料集『大阪・事業成績報告（1）大正 15 年度～昭和 8 年度』および『大阪・事業成績報告（2）昭和 9 年度～昭和 12 年度』や、『職制（1）』および『職制（2）』、機関紙『JOBK ガイド』（1928-29）、『ラジオ・オーサカ』（1947-49）などを調査した。次に、近畿圏においては、NHK 大阪放送局（大阪府大阪市）、大阪府立中之島図書館（大阪府大阪市）、大阪府立中央図書館（大阪府東大阪市）、大阪府立国際児童文学館（大阪府東大阪市）、大阪府立上方演芸資料館（大阪府大阪市）にて映像資料や関連資料の所在を確認し、その視聴と資料の閲覧に取り組んだ。ここでは、機関紙『JOBK ニュース』（1933-34）などを収集した。

第二に、初期テレビドキュメンタリーに関わった元放送関係者やその遺族、現役放送関係者や放送局史編纂担当者などに 34 名に対して聞き取り調査を実施した。本論文では、番組リストの作成を通じて確認した制作者の所在を調査し、2015 年～2020 年にかけて関東圏と関西圏にてインタビュー調査した。インタビュー時間は 1 回あたり 1 時間半から 3 時間ほどに設定し、1 名につき 1 回～4 回行った。質問内容は、NHK におけるキャリアパス、ドキュメンタリー番組の制作経験、1945 年～1970 年代における NHK の組織運営といった項目である。

第三に、表現自体の分析は、番組を書き起こす「書き起こし構成表」を作成し、これを

使って行なった。具体的には、NHK アーカイブスや放送ライブラリーで公開されている番組を視聴し、誰が話しているのか、何を映しているのか、どのくらいの時間のシーンとして編集されているのかなどの点に注意して、番組の書き起こしに取り組んだ。これを整理したものを「書き起こし構成表」とし、表現自体の分析に用いた。

5. 論文の構成

1. はじめに

1. 問題設定と先行研究
2. 研究目的
3. 研究方法
4. 章構成

2. テレビドキュメンタリー前史としての「録音構成」

1. 占領軍によるマイクの解放
2. 戦後のラジオ表現は、アメリカ経由の日本製
 - (1) 大衆の肉声を放送する『街頭録音』--ありのままの声はどうすれば録音できるのか
 - (2) 「ガード下の娘たち」--社会悪とみなされた人々の声を放送することへの挑戦
 - (3) 尻尾の長いマイク、編集の苦手な円盤、小声の Voice-Over ナレーション
3. 全体主義から、民主主義への急速な転換
 - (1) ホンネを聞かせる『社会探訪』--どうすれば「お座敷」放送から脱却できるのか
 - (2) 「浅草のジャングルを行く」--「真実の強さ」を届けることへの挑戦
 - (3) 機動力ある録音機、編集力の優れた磁気テープ、Voice-Over ナレーションの効力
4. 「録音構成」番組の開拓したドキュメンタリー表現
 - (1) 「弱者の民主主義」というドキュメンタリーの可能性
 - (2) 「ぶっきらぼう」な編集とリメディエーション
 - (3) 『街頭録音』から『社会探訪』への系譜の行方
5. 小括

3. ラジオと映画が交錯するテレビドキュメンタリー

1. 開かれたテレビの可能性
2. ラジオ文化としての「社会番組」のテレビへの移植
 - (1) ラジオドキュメンタリー「録音構成」からの着想
 - (2) テレビドキュメンタリー「フィルム構成」の思想
 - (3) 権威的な知としての声、管理される撮影現場、ドラマ化される現実
3. テレビドキュメンタリーの成立
 - (1) 羽仁進によるテレメンタリイ論の展開--新しいモンタージュ論への讃歌
 - (2) 映像の制度を揺さぶるテレビドキュメンタリーの＜偶然性＞
 - (3) 機動力に優れたオモチャ、「デタラメ」な映像論、テレビのアナキズム
4. アマチュアからの脱却、テレメンタリイからの後退
 - (1) 「素顔論争」の勃発
 - (2) 映像第一主義へ邁進するテレビ・プロデューサーたちの葛藤
 - (3) トレーディング・ゾーンとしてのテレビドキュメンタリー
5. 小括

4. JOBK の取り組みにみる初期テレビドキュメンタリーの展開

1. 地方／大阪からみる初期テレビドキュメンタリー史
2. 放送史のなかの JOBK
 - (1) 社団法人大阪放送局の発足―「BK らしさ」の原点
 - (2) 全国中継線の完成と進むラジオの中央集権化―上方「放送」文化の可能性
 - (3) 燃え上がる BK のテレビ熱
3. ドキュメンタリー表現にあらわれた上方「放送」文化
 - (1) 技術と人間の交錯の中で形成される初期テレビ制作の現場
 - (2) 「BK らしさ」として共有される「制作現場の知」
 - (3) 知性を失う神の声、ローカルな視点から描かれる現実、視聴者の遊戯性
4. 「BK らしさ」が生み出したテレビドキュメンタリー
 - (1) 「政治的スペクトラム」を押し広げるポリフォニー
 - (2) 「ヴァナキュラーな公共圏」としてのテレビドキュメンタリー
5. 小括

5. ポリフォニックなテレビドキュメンタリーの展開

1. 巨大組織を生きる2つのアイデンティティ
2. 「エリート」街道を進む放送マン、「裏」街道をゆく放送ウーマン
3. モノフォニックな物語構成に対するポリフォニックな物語構成への取り組み
4. ポリフォニックなテレビドキュメンタリーの矛盾と限界
5. 小括

6. <サラリーマン表現者>の葛藤

1. 自由で責任あるテレビ
2. 異なる「制作現場の知」が交錯する<東京>
 - (1) 視線の合わない話し顔、画面越しの「問いかけ」、挑発される視聴者
 - (2) キャリアデザインの変更―「留学」、転勤、そして栄転へ
 - (3) 制作現場への介入
3. 規律される「表現の自由」
 - (1) 「政治テロ」の波紋
 - (2) ライン=アンド=スタッフ=オーガニゼーションの思想と報道体制の強化
 - (3) 放送法の改正と政治介入されるテレビ
4. 初期テレビドキュメンタリーの周縁化
 - (1) 「暴力否定」キャンペーンと揺るがされる自主編集権
 - (2) 内部的メディアの自由と<サラリーマン表現者>
 - (3) 悪評と好評をかいくぐる『あなたは陪審員』
5. 小括

7. おわりに

1. 放送アーカイブを活用した初期テレビドキュメンタリー史
2. 今後の課題と研究の展望

8. 引用・参考文献

9. 巻末資料

6. 論文の内容

第1章では、これまでの『素顔』をめぐる先行研究を振り返り、本論文の問題設定を行

なっている。そのうえで、本研究の研究目的を提示し、その目的を達成するために採用した研究方法について説明している。以上を踏まえ、本論文がどのように議論を展開するのか、その概要を章構成において説明している。

第2章では、テレビドキュメンタリー『素顔』の前史としてしばしば言及される「録音構成」というラジオの文化形式に着目し、その名で呼ばれるドキュメンタリー表現がどのように成立したのか明らかにしている。ここでは、占領期に放送が開始された『街頭録音』（1945-58）とその派生番組として誕生した『社会探訪』（1947-1951）の系譜を録音構成の起点と捉え、その形成・成立プロセスを次の三点から検証している。第一に、ドキュメンタリー表現が占領軍の指導によって「輸入」されたことに着目し、放送政策という動態のなかで検証する。第二に、番組を実際に制作していた日本人スタッフが占領軍のフォーマットと自分たちのアイディアを掛け合わせながら、いかに日本のラジオドキュメンタリーに具体化していったのか把握している。第三に、占領軍が提示した民主的な番組のアイディアが、どのような経験を通じて「録音構成」として区別されていったのか検討している。

第3章では、『素顔』の草創期、番組の立ち上げに携わった東京スタッフ・吉田直哉の制作番組をとおして、日本にテレビが登場した1950年代に「テレビ的」な映像の可能性がどのように示され、テレビというメディアの固有性がどう捉えられたのかという観点から『素顔』を見直している。これを論じるため第3章は、初期テレビ制作の現場において、吉田がテレビドキュメンタリーという表現形式をどのように立ち上げていったのか、当時の撮影技術やテレビを取り巻く歴史的背景を踏まえながら検討している。

このようにして初期テレビ制作の現場におけるテレビ制作者の模索や葛藤から見えるのは、『素顔』は、教育的な効果を目指して開発・放送されたフォーマットだったにもかかわらず、ラジオに出自をもつ映像ソフトの制作経験がない「素人集団」が番組を担当したことで、その企図から外れて映像の多義性を開いていたということである。そうした事情があったにもかかわらず、映画産業の人々は映画では試みられたことのない、テレビが切り拓いた新たなモニタージュ論の誕生として『素顔』を激賞し、テレビドキュメンタリーという新しい表現の成立であると喜んだ。このように第3章では、『素顔』をめぐる吉田を筆頭とする制作者たちの模索や葛藤から『素顔』の重層性と複数性を論じている。

第4章では、東京の『素顔』制作チームと共にその制作を担った「BK」というNHK大阪放送局の制作集団とその制作番組に注目し、彼ら彼女らがテレビドキュメンタリーの制作というものをどのように経験していたのか明らかにしている。ここでは、次の三点から『素顔』の見直しを行った。第一は、『素顔』が東京と大阪という2つの制作現場で「分担」制作されていたことに注目し、BKの立ち位置や制作文化を組織的・制度的文脈に即して把握することである。第二は、テレビ以前から存在する文化形式をBKの人々がどう受け継いだのか、映画とラジオとのつながりに注目し、技術と人間の交錯の中で形成された初期テレビ制作の現場を確認することである。第三は、テレビドキュメンタリーというアイディアを、BKの人々はいかに理解・共有したのか、放送番組を視聴して記述するというテキスト分析を行うことである。

以上の作業から第4章では、二つの点で「BKらしさ」を備えるテレビドキュメンタリー

が成立していたということを明らかにしている。一つは、東京『素顔』で開拓された普遍化された全体的な視点から「ひとつ」の現実をありのままの記録として提出するリアリズムの形式ではない、ポリフォニックなテレビドキュメンタリーのスタイルを開拓したということである。もう一つは、そのような表現スタイルを生み出すことで大阪『素顔』は、東京『素顔』のように理知的な議論においては常に社会問題として取り上げられただけで、自らが主張する言葉も機会も与えられてこなかった社会的弱者の声を表出する場を供し、その存在をあるがままに肯定し認めていくような「ヴァナキュラーな公共圏」を『素顔』によって立ち上げていたということである。

第5章では、「BK」という制作集団に属した男女2人の番組スタッフに注目し、彼ら彼女らのキャリアパスとその制作番組を次の三点から比較して、ポリフォニックなテレビドキュメンタリーの重層性と複数性を検討している。第一は、性別の違いは初期テレビ制作の現場においてテレビドキュメンタリーを制作するという方法論の習得にどのような機会の違いを生んだのか、彼ら彼女らのキャリアパスからこれを把握することである。第二は、性差に端を発する職業差別は、初期テレビ制作の現場において『素顔』を制作することや彼ら彼女らのキャリアパスとどのように結びついていたのか、マネジメント戦略や部門別の編成といったフォーマルな仕組みや制度との関連からこれを把握することである。第三は、二人が手がけた番組を取り上げ、テキスト分析することでその違いや特徴を指摘することである。

こうした作業から明らかにしているのは、性別によって労働と人間を区分して文化的な空間を編成していこうとする初期テレビ制作の現場の実態である。けれど、こうした性差による職業差別は、BKという制作集団の中で理解・共有されたポリフォニックなテレビドキュメンタリーを制作するという意図や形式を複数化し、むしろ、その可能性を押し広げるような試みを生み出してもいた。このように第5章では、異なるアイデンティティを付与された二人のBKスタッフのキャリアパスと制作した番組を比較することで、初期テレビドキュメンタリー史にジェンダーの観点を加えることを試みている。

第6章では、安保改正をめぐり政治の混乱状態が頂点に達した1960年に起きた3つの変化を糸口に、人事政策によってBKのローカル性が弱められていくのと並行して、『素顔』の重層性や複数性が縮減していく様子を明らかにしている。ここでは、次の3点から安保闘争期に『素顔』からBKのローカル性が弱まっていく過程を検討した。第一に、テレビの政治的な力をコントロールしようと政府・自民党が試みた放送制度や放送規制にはどのようなものがあつたのか、放送政策という動態のなかで検証することである。第二に、そうした制度や規制による影響力の行使がどんなNHKの組織活動を誘発させたのか、当時の組織編成や経営戦略からこれを把握することである。第三に、そのような組織活動が活発化するなかで、BKに出自をもつ番組スタッフはそれをどう解釈し、その環境下においてどのような『素顔』を放送し続けていたのか、表現自体の詳細な検討から明らかにすることである。

以上の制度的・組織的背景の動態の把握と人事政策によってばらばらにされていくBK制作集団の足跡から明らかにしているのは、テレビに対する政治的な圧力が高まる中で、

『素顔』に新たな観点をくわえようと奔走し、映像表現の可能性を拡張しようと奮闘した初期テレビ制作者の姿である。その取り組みはやがて、テレビドキュメンタリーというジャンルを超え、近接するドラマやニュース、バラエティと合流し、ドキュメンタリードラマやニュースショーといったジャンルと混交しながら新たな領野を切り開いていく。

最後に、おわりにでは、ここまでの議論をとおして明らかになった本論文の知見をまとめ、今後の課題をまとめている。

7. 論文の評価

(1) 学術研究・論文としての形式的要件

本論文は、論述の形式、注の示し方、文献リストの表示など、学術論文として必要な形式的要件を満たしていると判断される。主題である初期テレビ制作の現場におけるドキュメンタリー制作手法の展開を明らかにするために、『日本放送協会会報』『日放労』『大阪・事業成績報告』などの一般公開資料を渉猟し、『素顔』の制作に関わった多数の制作者・遺族に聞き取り調査を実施している。また、NHK アーカイブスなどの放送アーカイブで視聴可能な『素顔』のすべての構成書き起こし作業を行なっている。これらは、放送史の研究方法として適切な手続きとして評価できる。

(2) 達成と貢献

本論文の貢献として評価されるべきは、以下の三点である。

第一に、『日本の素顔』は、日本における社会派ドキュメンタリー番組の先駆け、放送史研究における重要番組として、これまでも多くの研究者や制作者によって言及されてきた。ただし既存研究の多くは、同番組の立ち上げに主導的な役割を果たしたとされる AK 所属の吉田直哉のドキュメンタリー論と彼の制作番組を基礎として論じられてきた。他方本論文は、AK や BK に関わる公開資料をつぶさに検討することで、『素顔』に関わった吉田以外の制作者と制作番組を網羅的に確定することに成功している。取り分け、AK とは違う設立経緯を辿ってきた BK 所属の制作者が、『素顔』制作に少なからず貢献してきたことを明らかにした点で、『素顔』研究に新たな知見を加えたといえることができる。

第二に、資料調査によって浮かび上がった『素顔』制作者に直接聞き取り調査を行うことで、活字資料だけでは窺い知ることのできない、いわば「制作現場の知」といったものを抽出している。それは、『素顔』の制作現場で取り交わされ、共有されたテレビドキュメンタリー制作に対する特定の価値や確信、あるいは仕事のパターンなどである。本論文は、埋もれていた『素顔』関係者の言説や番組を掘り起こすことで、初期ドキュメンタリー研究に新たな視点を導入することができている。

第三に、本論文は、「神の視点」から社会問題を告発する吉田直哉の啓蒙的な制作姿勢に対置するように、BK の『素顔』制作者たちが社会的弱者の姿をあるがままに記録するポリフォニックなテレビドキュメンタリーのスタイルを押し進めたとする。『素顔』以後のドキュメンタリー番組とも比較検討できる方法論の多様性が、すでに『素顔』にも萌芽的に存在していたとの筆者の評価は、既存の『素顔』研究には見られなかった独創性のある提起

である。

（３）問題点と残された課題

本論文は、積み重ねられた調査の厚みと新たな『素顔』像の提示という点で評価できる一方で、なお考察を深めるべき課題を残している。

第一に、制作集団としてのBKの『素顔』制作者の間で共有されたテレビドキュメンタリー制作現場の知とは何であったのか、AKのそれと対置できるような制作手法の多様性とは何であったのか、収集した資料やインタビュー結果をさらに読み込み、より厚みを持った形で明確に記述することが求められる。例えば、第２章で『素顔』の前史として取り上げられた『街頭録音』や『社会探訪』といったラジオドキュメンタリーの制作者が、『素顔』制作にどのように関わったかを実証的に検証すべきである。

第二に、BKの『素顔』制作者間で形成された制作文化は、同時代のさらには『素顔』以後のドキュメンタリー番組・制作者とどのような影響関係にあったのか、より深く考察されるべきである。第３章で取り上げた「素顔論争」の端緒となった羽仁進のテレメンタリイ論は羽仁自身の作品にどのように反映されたか、その検討から「素顔論争」を再評価できないであろうか。また、BK『素顔』の制作者たちは、『素顔』終了後、様々な番組制作のキャリアを歩んでいくが、『素顔』の制作経験がどのように継承されていったのか、第６章の記述よりもさらに考察を進めていくべきである。

第三に、この論文で提起されているBK『素顔』のポリフォニー性とは何か。ナレーション、取材対象者の語り、映像の関係性などの分析から、より明確に確定できるような方法論の彫琢が求められる。

口述試験では、審査委員をはじめとする出席者から、上述の点を中心に活発な質疑・討論がなされた。筆者は指摘された問題に対して現時点での自らの見解を明確に示し、今後取り組むべき課題についても了解している。研究の継続の中で、さらに調査の幅を広げ、考察を掘り下げていくことが期待される。

口述試験の結果も含めて、審査小員会は、本論文が、明確な方法論的意識に基づいて必要とされる調査を実施し、ドキュメンタリー研究にいくつかの重要かつ独創的な貢献を行っていることを確認し、博士号の授与にふさわしいものと判断した。

以 上